

# 川西南の「西番」における民族識別（1）

—プミ語集団の場合

松岡正子

## 目次

はじめに

### 1. 「西番」と民族工作

- (1) 西康の「西番」と民族工作
- (2) 「西番」という用語

### 2. プミ族になった雲南のプミ〈西番〉

### 3. チベット族になった川西南のプミ〈西番〉

- (1) 本里県における 1950 年代の民族工作
- (2) 川西南〈西番〉における民族識別
- (3) 民族幹部・穆文富

おわりに

参考文献

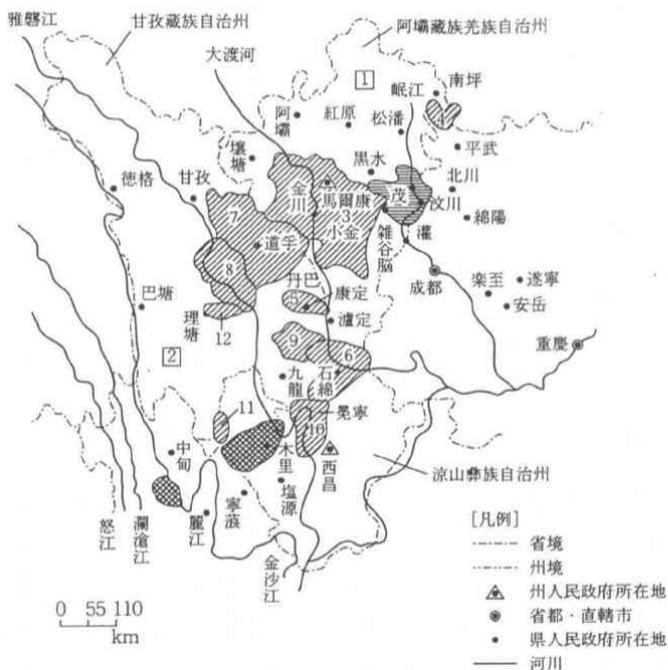
## はじめに

四川省西南部（以下、川西南と記す）に居住するチベット族は、かつて「西番」と総称され、チベット自治区や青海、甘粛のチベット族とは異なる言語や文化をもつ。彼らは、古代の中国西北周縁部で活躍した遊牧民「羌」の末裔ともいわれ、長期におよぶ移動と他民族との融合を経て青藏高原東端の峡谷地帯に定住し、現在も複雑な言語系統や民族構成を形成している〔松岡 2000：239～246〕。

本稿は、川西南「西番」が人民共和国下の民族識別でどのような過程を経てチベット族とされたのか、中央の人民政府側と現地の民族側の間でどのような協議がなされたのかを明らかにし、川西南「西番」にとっての民族識別の意味を考察するものである。

チベット族は、総人口 5,416,021 人 (2001 年)、西藏自治区を中心に青海省や甘肅省、四川省、雲南省に分布する。このうちチベット族総人口の約 4 分の 1 を占める四川省のチベット族は、言語系統の違いによって 2 つに大別される。一つは、漢・チベット語族チベット・ビルマ語系のチベット語群に属するアムド語やカム語を話す集団で、省内チベット族人口の約 85 % を占める。いま一つは、同じチベット・ビルマ語系のチャン語群に属する言語を用いる集団で、さらに 11 の異なる言語グループにわかれる (図 1)。川西南の「西番」とは、11 のうちの康定以南の集団をいう。

〔図 1〕四川チベット族の分布



〔出所〕  
四川省人口普查辦公室編「四川藏族人口」(中国統計出版社、1994)4-6頁、孫宏開「六江流域的民族語言及其系屬分類」(『民族學報』、1983)1983-3より作成。(松岡正子「青藏高原東部の少数民族—チャン族と四川チベット族」ゆまに書房 2000年239頁より)

チベット族					
1	アムド	821	7	アールゴン	45
2	カム		8	ジャバ	15
3	ギャロン	120	9	ミニヤック	15
4	白馬	12	10	ナムイ	15
5	クイリヤン	7	11	シシン	2
6	アルスー	21	12	チュ	15

○ チャン族    ● ブミ族・ブミ藏族

西番という名称は、時代やだれが用いるかによって含まれる地域や意味が異なる。広義には、明清時代以降、中国西部に居住したチベット系の集団を総称し、「番」とも記された。また民国期の西康の地方志では、番は康番、藏番、西番の3つに分けて区別された。これに対して狭義には、川西南のチベット族に限定され（以下では〈西番〉と記す）、すでに晋代『博物志』に記されている〔松岡、2003：420～421〕。

「西番」（西康の「番」）の民族識別については、1960年代の第1回目の識別で康番と藏番がチベット族とされたのに対して、〈西番〉はチベット族、西番族、プミ族の3つの民族に分けられた。しかし1980年代の第2回目の識別で西番族はチベット族に統合され、西番という名称は公式の民族名称から抹消された。

本稿では、第1回目の民族識別工作で「西番」集団がどのような経緯を経て3つの民族になったのか、第2回目に西番族が消えたのはなぜか、中央政府側の意図や住民の意識、特に両者の間にあって大きな影響力をもち、媒介的役割を果たした民族幹部の動向を分析して、集団や個人における民族識別の意味について考察する。

なお西番に関しては、〈西番〉のなかで最多の人口をもつプミ語集団と現在もなお西番族を名乗ることを望む九龍県のナムイ〈西番〉に分け、本稿では前者について報告する。本稿で事例としたプミ語集団は、四川省涼山イ族自治州木里藏族自治県のT村と雲南省怒江リス族自治州蘭坪ペー族リス族自治県Q村で、2001年7月と2001年3月に現地調査を行った。前者はプミ・チベット族、後者はプミ族が最も集中する居住地の一つで、ほぼ自民族だけで構成され、伝統的な文化が比較的良好に保持された地域とされている〔松岡、2003：420〕。

## 1. 「西番」と民族工作

### (1) 西康の「西番」と民族工作

チベット人は、自らの土地を西部のガーリー、中央チベット（東のウーと西のツェン）、北東部のアムド、東部のカムに分ける〔奥山、1989：182〕。西康は、このカム（康）の地にあたる。1939年1月から1955年9月まで

この地には西康省が建てられていたが、55年10月に金沙江以西はチベット自治区に、以東は四川省に分割された〔四川省編輯組 1985：1〕。西康省は、総面積が約15万平方キロメートル、大渡川、雅礮江、金沙江、瀾滄江、怒江の5つの大河が南北に貫流し、平均海拔が3000メートルを越える峡谷地帯である。このうち四川側の西康特区14県は、歴史的に、これらの大河に沿って複数の集団が移動と興亡を繰り返した地域であり、費孝通はこの地の民族構成と言語の複雑さを指摘して「民族走廊地区」と名づけた〔費、1995：342～345〕。

西康の民族については、主要な「種族」として漢族とチベット系の「番」がおり、清代以来、「番」の下位は「藏番」、「康番」、「西番」の3つに区別された。藏番は現在の西藏チベット族、康番（康藏）は現在のカム・チベット族、「西番」は土司および土民をさす。「西番」の名称は、松藩鎮（現在の阿壩州松藩県）の土司（『清史稿』巻525、巻513）や同地のアムドヤカム・チベット族（乾隆『西番訳語』）にも用いられており、川西南の〈西番〉より広範である。〈西番〉については、甘洛、漢源県の土司の項にみえ（嘉慶『四川通志』巻91）、土民や番民として登場する。例えば懋功県（現在の四川省阿壩州の金川県、小金県）には、漢、回、藏の3民族以外に「番民」と呼ばれる集団がおり、漢回藏に同化されていてすでに種の名称はない、とある〔邊政設定委員会編、1940：3〕。ただし土民の類の語は民国時代に非漢族として公式に認められた満、回、蒙古、藏に含まれない集団名称であるため、記述はあまり多くないうえにカテゴリーも曖昧である。

しかし西康のなかで九龍県は、かつても現在も特殊である。民国の「西康特区十四県最近調査表」には、14県の「種族」の記述の中で唯一西番族の存在が明記されている。それによれば、九龍県の種族は番、漢、猓、苗、西番の五族からなり、漢民は全人口の5分の3、番民と1民は5分の2を占め、苗民と西番はわずかである。このうち番と西番の違いは、言語と衣服に顕著である。ともにラマ教を信じ、火葬を行うが、言語が異なり、西番は、日常の服装が男性、女性ともに漢族に近い、とある〔邊政、1930：100～102〕。九龍県の〈西番〉は、自称をナムイといい、〈西番〉の中でも自民族意識が最も強い集団である。彼らは、1980年代に識別調査が再開されるまで西番族をなっており〔伍甲、1985：56〕、Z村のナムイは、チ

ベット族とされた現在も西番族であることを主張している。彼らは西番の語を蔑称ではなく、自集団を象徴する名称として意識している<sup>(1)</sup>。

現在、西康の「西番」諸集団は、下位集団の分類について諸説があるが、チベット族、チャン族、プミ族の3つの民族から構成され、さらにチベット族はアムド、カム、ギャロンなど13の下位集団に分けられている(図1)<sup>(2)</sup>。

では、人民共和国下では西康の「西番」に対してどのような民族工作および民族識別工作が進められてきたのだろうか。中国における民族政策は、①民族間の政治的、経済的平等、②民族区域自治政策、③民族・宗教リーダーとの統一戦線の3つを基本原則とする。民族識別工作は、この民族政策の基礎となる作業であり、国家は、民族を認定し、各民族の発言権の保証を目的とした各級の人民代表の定員をわりあてた<sup>(3)</sup>。識別の基準は、共通の居住地、経済生活、言語、民族の意識と感情に加えて、民族名称や民族の来源、歴史上の周辺民族との関係などが考慮された。また族称は自民族に決定権があるとする「名従主人」の原則に基づいて、大衆と「愛国上層人士」の意見が尊重された〔黄光学等、2005：81～103, 284〕。

西康の「西番」における民族工作は、康定を境として以北のカム、アムドおよびギャロン・チベット族などの集団と以南の川西南(西番)諸集団とでは特徴が異なるため、違った過程で進められた。両者の大きな違いは、チベット仏教への帰依の深さにある。前者は、チベット仏教が住民の精神的支柱として日常生活や行動規範に深く浸透しており、ラマ僧は冠婚葬祭に不可欠で、寺院への寄進や男子の出家も少なくない。そのため60年代の民族識別調査時には自己申告によって自らをチベット族であると申請して認められた〔松岡、2000：239～246〕。これに対して後者は、民族や言

(1) 九龍県のナムイ(西番)については、2004年9月、11月の四川省甘孜藏族自治州九龍県Z村における調査に基づいて本稿第2部で述べる。(西番族)を名乗る集団は、九龍県科邦村や木里県水洛郷にも現存していることを2001年3月、4月の筆者の現地調査に基づく事例で報告している〔松岡、2005：175～205〕。

(2) 「西番」諸集団の歴史や分類については〔松岡、2005：176～180〕、言語分布については池田巧(2002)「西南中国(川西民族走廊)地域の言語分布」『消滅の機器に瀕した言語の研究の現状と課題』(国立民族学博物館報告39：46～114頁)に詳しい。

(3) 天兒慧等編著(1999)『岩波現代中国事典』参照。民族政策は1200～1201頁(毛里和子)、民族識別工作は1199～1200頁(横山廣子)による。

語が複雑で統一的なものがなく、しかも〈西番〉として藏番や康番と区別されてきたためにチベット族であるか否か、という点から議論が始められた。

西康における識別工作は、上記の3つの基本原則に基づいて行われた。まず第1の民族平等政策については、「西番」という名称は蔑称であり改めなければならないとされた。これは、差別的な民族呼称や地方名の廃止を目的とした1951年の「中央人民政府政務院関与処理帶有歧視或侮辱少数民族性質的称谓，地名，碑碣，匾聯的指示」による。改定後の名称は、康定以北の集団はチベット族とされたが、川西南〈西番〉は下位集団が複雑であったため統一的な名称を確定することができず、暫定的にほとんどをチベット族とした。

第3の民族・宗教リーダーとの統一戦線とは、民族を代表する旧来の上層部を「愛国上層人士」として温存し、現地新政権のトップにすえて、解放後も政治的、宗教的に大きな影響力をもち続けている彼らによって民族地区を平和的に間接的に統治しようとしたものである。特にチベット仏教を深く信仰する多くの「西番」にとって、仏教界上層部の動向は大きな意味をもっていた。よって民族工作において現地の意見を重視するとは、実は民族上層部の意見を聞き、説得することであった。そこで中央政府は、旧上層部の意識改革をはかるために中央から慰問団や政府関係者を派遣して彼らの説得工作にあたり、内地の都市への参観や地方政権幹部への登用を進めた。また中央政府は、政府側についた旧上層部によって反政府の「土匪」の壊滅を進め、同時に新たな民族幹部の養成、人や家畜にたいする医療と防疫の提供のほか、食糧や衣料の無償配布などの貧困対策も実施した。

民族識別工作の具体的な過程は、大きく4つの段階にわけられる。第1段階は、人民共和国成立から1954年までで、「名従主人」の原則にそって53年の第一次人口センサス時に申請された民族は400を超えた。そこで中央は各民族地区に訪問団を派遣して民族識別の宣伝と民族調査を行い、まず38の民族を認定した。第2段階は、54年から64年までで、広範な民族調査と識別工作が進められ、15の民族が追加認定された。雲南側の〈西番〉がプミ族に認定されたのがこの時期である。第3段階は、65年から78年までで、65年にロッパ族が認められた後は、文化大革命によって識別工作は10数年間中断した。第4段階は、78年から90年代までで、これまで

## 川西南の「西番」における民族識別 (1)

の識別工作において未解決であった数十種、百万人をこえる集団の再調査が開始された。〈西番〉のプミ語集団である四川のプミ・チベット族と雲南のプミ族についても重点課題としてとりあげられた。また少数民族への様々な優遇政策の実施を背景に、民族地区の漢族を中心に少数民族への民族改正を求める者が激増し、82年から90年までに約500万人が民族回帰した。例えば四川では、チャン族の人口が82年には約10万であったのが90年に約20万、2001年には約30万に達した。またチノー族の認定により55の少数民族が確定した〔黄光学等、2005：104～117〕。

## (2)「西番」という用語

「西番」という用語は、時代や地域、誰が用いるかによって様々なカテゴリーをもつ。特に、人民共和国下の民族識別では蔑称であるとして公的な名称から排除された。しかし九龍県のナムイ・チベット族のように、西番の名称を自集団の象徴として現在も誇りをもって伝えているグループもある。では、なぜこのような全く逆の評価があるのだろうか。

蔑称の意味は、「番」の語に由来する。「番」は「蕃」とも記す。山口瑞鳳は「吐蕃」についてつぎのように推測する。唐代の漢人はチベットを「吐蕃」と呼んだ。「吐」は「南」をいう「ho」の音訳である。「蕃」は、元来の「發」の代わりに、彼らが「ボン」教徒であったことから蔑称として採用されたものである。「發」は「ピャー」（「Phyva」不夜）の音訳で、チベットの支配階級が用いる部族名の美称である。ヤルルンの王は隋に朝貢した「附国」から「南のピャー」とよばれ、音訳で「吐發」とされ、Tupptから「チベット」に訛り、蔑視の意味をこめた「吐番」にいいかえられた、と〔山口、1987：xvi～xvii〕。

またスタンは、「蕃」は古音が〈Biwan〉であることから、「(Bodは)チベット人が自分たちの国を指して呼ぶBod（今日、中央チベットの口語ではプゥと発音される）の称」で「七世紀以来チベット人に関する情報に非常にくわしかつた中国人たちはBodを蕃（古音Biwan）という文字で音訳した」とする〔スタン、1987：16〕。現代チベット語では、「ba (pa)」は〈…の人〉を意味する。『木里県志』によれば、藏族という名称は漢語の呼称であり、藏族の自称は「蕃」あるいは「博」〈baあるいはbo〉で、統称

を「蕃(博)巴」とする。

以上によれば、「西番」あるいは「西蕃」とは、元来「西のピャー、西の人」を意味する音訳であり、自称の bo あるいは po の音を「蕃」「番」等の文字で音訳したことに漢族側の蔑称の意図が示されている。「西番」という名称の文献における初出が晋代・張華『博物志』の蜀の〈西番〉であることから考えれば、「番」は bo の音訳であった可能性が高い。以来、狭義の川西南〈西番〉は、宋代の『宋史』巻 49 蛮夷 4 の沈黎郡（現在の四川省甘洛県）に「西蕃」、元代の『異域志』阿丹に四川省塩源県や木里県の〈番〉として記されている。現在の九龍県のナムイにとって西番族は xibo であり、「西の人」の意味を伝えるものと推測される。彼らは、シャーマンが葬式の時に読む「帰路経」によって、ナムイの祖は西方から移りきた人々であり、西藏のチベット族と敵対していたこと、彼らこそチベット仏教伝来以前の真のチベットであると語り伝えている<sup>(4)</sup>。

### 3. プミ族になった雲南のプミ〈西番〉

プミ語集団<sup>(5)</sup>は、川西南〈西番〉の下位グループの一つで、プミ語を共通の言語とする。〈西番〉の中では最大の人口を有し、かつては「大西番」ともよばれた。1990年の統計によれば、総人口は約5万人で、金沙江を挟んで西側の雲南に23,634人、東側の四川に約26,700人いる。しかし言語や祖先を同じくする集団でありながら、1950～60年代の民族識別では雲南側はプミ族、四川側はチベット族に分かれて異なる民族集団とされた。

プミ語は、漢・チベット語族チベット・ビルマ語派チャン語群に属し、〈西番〉諸語の中で最もチャン(羌)語に近い。北部と南部の2方言に大別される。北部方言は四川プミを中心に約33,000人が使用し、南部方言は雲南プミの約9,500人が用いる。しかし四川プミのほぼ全員がプミ語北方

(4) ナムイ〈西番〉は、雅魯江流域の冕寧、木里、九龍の県境の山間に集中して居住する。筆者の1994年から2004年までの調査によれば、ナムイには笨波派(黒教)とシャーマン「パビ」を主とした土着の信仰がみられるが、前者の「和尚」や後者のシャーマンはすでに激減し、木里笨波郷周辺には一人しかいない。彼は最も偉大なパビの息子で、現在は主に葬式をとり行う。葬式で唱える「帰路経」にはナムイ〈西番族〉の由来を描いた絵巻物が伝えられている。

(5) プミ語集団については、[松岡, 2003: 419～475]による。

言を日常語としているのに対して、雲南プミではすでに 40 %以上がプミ語を話すことができない。それは、四川プミが木里県に 80 %以上の人口が集中し、主要な民族としてほぼ自民族だけで集落を構成したのに対して、後発の民族であった雲南のプミ族は、先住民族のペー族やナシ族等の政治的支配を受け、その言語を習得して共住するという道を選ばざるをえなかったからである。

伝説によれば、祖先は古代民族「羌」の一支で、2回の大移動によって四川と雲南に2つの集住地が形成された。第1次の移動は紀元前から7世紀頃までで、中国西北部から雅魯江に沿って南下し、木里や塩源の木里河流域の山間部に集落を作った。これが現存の四川プミである。第2次は13世紀に元のフビライ軍が金沙江を超えて雲南西北部に入った時に四川プミの一部が従軍して雲南の永勝や麗江、維西、蘭坪などに定住したもので、これが現在のプミ族である。このうち四川プミは、後に吐蕃の支配を受けてチベット仏教を受容し、自民族だけの閉鎖的な社会を形成したのに対して、雲南プミは後発の弱小集団として先住のナシ族やペー族の支配を受け、衣食住や言語などに大きな影響を受けた。

雲南プミの民族識別は、1954年から10年余りにも及んだ。識別工作は、4つの段階を経て進められ、第1、2段階では現地調査をふまえた現況の分析、第3、4段階では族称問題が検討された〔胡文明、2002：1～7〕。

第1段階では、1954年5月、中国科学院語言研究所、中央民族学院研究所、雲南大学、西南民族学院、雲南省民族事務委員会（以下、雲南民委）など7単位の46人で組織された雲南民族識別研究組が29の集団を調査した。プミに関しては蘭坪と寧蒭がとりあげられ、方国喻らが『蘭坪、寧蒭“西番”族識別小結』を報告した。第2段階は、同年8月、中央民族事務委員会が派遣した雲南民族識別調査組が39の集団を調査し、永勝と麗江のプミについて林耀華らが『永勝、麗江両県西番識別小結』を報告した。

2つの報告によれば、プミ語はチベット語の方言ではなく、単一の言語とみるべきで、チベット・ビルマ語派のチベット語とチャン語と並ぶものである。移住経路については、祖先は北方から南下して西康の木里に定住し、元代フビライの時にさらに寧蒭—麗江、魯甸—蘭坪の順に移住したとし、四川プミと祖先が同一であることを示唆している。また雲南の寧蒭プ

ミは、当時も四川の木里プミとも日常的に往来があり、通婚関係があった。プミの社会は父系親族集団の結びつきを基礎としており、同族内では相互扶助、族長による揉め事の調停、一堂に会して新年を迎え、3代の祖先の名を唱えるなどを行う。葬礼では、シャーマンがヤギを犠牲にして「指路経」を唱える。寧蒗と永勝では火葬を行い、骨壺は同族の洞窟に納めるが、蘭坪や麗江では土葬が主流となっている。また13歳の「入社式」(成年礼)や独自のシャーマン、山神や水神の祭り、新年の時に犬に食事を先に与えるなどに共通した独自の文化的要素がみられる。ただし衣食住や宗教には先住のナシ、ペー、リス族などの影響が強くみられる〔方、林等、2002: 6～11〕。

以上のように言語、移住の歴史、葬礼、成年式、山神祭り、シャーマンなどの基層の歴史や文化において隣接する同省の中甸チベット族とはかなり異なっており、一方、四川の木里プミとは類似性のあることが明らかにされた。その結果、両報告とも、雲南〈西番〉はチベット族ではなく、かつての西康省の西番とも違いがあることから、単一の民族とすべきであること、族称については、かつての〈西番〉には蔑視の意味がふくまれており、しかも従来〈西番〉では広義の西番と紛れやすいという理由から、〈西番〉を改めて、共通の自称である「普米」(プミ)を正式の民族名称とするのが妥当とした。

第3、4段階では、この2つの報告書をうけて族称について討議された。まず第3段階では、1960年1月、雲南民委が麗江専署を設け、2月14～17日に全区少数民族代表座談を開いて族称問題を討議し、西番代表の同意を得たうえで、自称に基づく「普米」(白人の意)を族称に決定した。さらに第4段階では、1961年5月、雲南民委が民族識別総合調査組を組織し、雲南省委と中央民委の同意を得て雲南省人民委員会に『関与将“西番族”改稱為“普米族”的報告』を提出し、6月にプミが正式に民族名称として承認された。

族称の決定には、原則として住民の意向や希望が重視された。しかし実際は住民代表、すなわちその集団の上層部の意見によるものであった。多くの住民にとって族称とは生活圏内の異なる集団との違いを明確にするものにすぎず、国家レベルの民族名称という意味が理解されるにいたってい

なかった。50年代初期に西昌専区協商委員会副主席であった穆文富によれば、80年代以降、雲南寧蒭のプミ族が親戚を訪ねて木里県にたびたび来たが、現地の子ベツト族をみて自分たちがプミ族になったことを後悔していた、という。彼によれば、プミ族は55の少数民族の中でも人口3万人以下の22の弱小民族の一つにすぎず、独立した民族としての発言権はあっても大民族の子ベツト族に較べて全体への影響力は極めて小さく、享受できるものが少ないからだという。

また前述の2つの報告では、雲南のプミは西康のプミとも異なると報告されたが、当時はまだ西康の西番について詳細な実態が明らかにされていなかった。複数の言語を異にする集団があることはわかっていたが、いくつかの下位集団があるのか、分布や人口も特定されていなかった。特にプミについては、木里のプミとの関連が問題として残されたままであったため、80年代に民族識別の再検討がなされた時、木里プミの民族としての所属は重要な課題の一つとして提起された。

#### 4. 子ベツト族になった川西南のプミ〈西番〉

##### (1) 木里藏族自治州における1950年代の民族工作

四川側のプミ〈西番〉は、木里藏族自治州<sup>(6)</sup>に集中して居住する。彼らは60年代の識別で暫定的に子ベツト族とされたが、それには木里が子ベツト仏教を深く受け入れた地域であるという特異な事情があった。

『木里県志』(1995年)によれば、木里における人民共和国内成立後の民族工作はつぎのように進められた。人民共和国内成立以前、木里は塩源県の一部で、政治上は八爾土司の領地であった。世襲の土司制度は明代万歴年間(1593-1644)に始まり、共和国内成立前まで続いたが、土司となる者は一族中の年少の男子から選ばれて出家し、ラマにならなければならなかった。すなわち政教

(6) 木里は、16世紀以降、子ベツト仏教格魯派の3つの寺院に分割統治され、元来の住民である子ベツト族は子ベツト仏教を深く信仰した。イ族はこの100年余の間に冕寧などから移入し、漢族は清代中期以降、軍とともに移住してきた。1953年の木里藏族自治州成立時には、すでに子ベツト族、イ族、漢族の順でこの3民族が人口の大部分を占めた。子ベツト族は、子ベツト支に属する言語をもつガミとチャン語支に属する言語をもつプミ、シュミ、プーラン、リル、西番族からなる。

一致体制のもとで土司は大ラマを兼ね、衛門（役所）の官吏もほとんどがラマであり、領地もチベット仏教格魯派（黄教）の木里、康坞、瓦爾寨の3つの大寺院が分割して治めた。

1950年4月、人民解放軍は初めて木里に入り、まず宗教界上層部への工作を始めた。1951年1月、中国人民解放軍西昌軍事管制委員会は1951年1月に西昌専区協商委員会副主席の穆文富（冕寧ナムイ・チベット族）らを派遣して木里の大ラマと会談させ、塩源県で開催される第2回各族各界人民代表会議に代表をだすこと、民族代表を西昌の幹部学校で学ばせることへの同意を得た。2月には宗教界上層部が中国共産党への服従を表明し、「烏拉」制度やすべての租糧など33の負担を廃止し、6月には大ラマや牟文富らからなる木里藏族自治州準備委員会がたちあげられた。51年9月には大ラマらが成都、重慶、武漢、南京、上海、天津などを参観した。1953年2月、「木里藏族自治州人民政府」が成立し、8月に民族、宗教界上層部およびすべてのラマ層に食糧の定額補助、9月に民族小学校を開設してチベット語文課を加え、110人の学生を入学させた。上半期で救済した者は78万8961人、救済米は7万5105斤、貸借金3899万3千元、11月には約130人の上層部と1,141人のラマ層に3億元の生活補助を与えた、という〔木里藏族自治州志編纂委員会編、1995：2～3〕。

しかし1953年3月から反政府暴動も表面化した。「木里県平叛始末」によれば、東朗や麦日だけではなく全県に広がる土匪が康坞大寺や木里大寺、各地のラマ僧と共謀して反政府派を組織し、政府機関を襲撃して役人を殺害した。結局、59年9月の収束までに討伐された反政府派は4,251人、主犯格のうち死亡は33人、負傷6人、捕虜27人、投降84人に達したのに対して、政府側は人民解放軍と警察が1,215人、県の幹部と民兵400人が動員され、うち死者52人、負傷は49人であった〔木里藏族自治州政府弁公室、1992：195～200〕。

以上のように木里では、16世紀にチベット仏教黄教が伝来して以来、住民はチベット仏教に深く帰依し、政治的にも精神的にもチベット仏教の寺院、大ラマがすべてを管轄した。そのため人民共和国の成立は、政治的変化のみならず、宗教上の規制あるいは禁止を意味するものにとらえられた。チベット仏教への対処は、現在もなお大きな課題である。

## (2) 川西南〈西番〉における民族識別

川西南〈西番〉に関する民族識別調査は、60年代と80年代に行われた。第1回目は、1960年に雲南西番がブミ族と認定されたことを受けて、1961年に四川省民委工委が組織したもので、張全昌「四川西番識別調査小結」(1962)が報告された。張報告によれば、当時の〈西番〉は約24000人で、その70%が木里県に集中し、残りは塩源や甘洛、越西などに分布する。四川〈西番〉と雲南ブミの間には、言語や宗教に明確な違いがある。例えば雲南側がブミ語やブミという自称を共有するのに対して、四川側には10以上の異なる言語と自称をもつ集団がある。また宗教においては、四川側はたびたび吐蕃の支配を受け、18世紀半ば以降はチベット仏教黄教が伝来して人々の生活に深く浸透した。ただしなおチベット仏教伝来以前の宗教や西藏のチベット族とは異なる独自の生活習慣があり、それらは雲南ブミとの類似点でもあるとして、より深い調査の必要性を提言している。しかし四川側におけるラサに直結したチベット仏教寺院の宗教的、政治的支配は住民自身のチベットへの帰属意識に大きく影響を与えており、識別時には住民の大部分が自らをチベット族であると申請した。

しかし80年代の民族識別の再調査までは、なお複数の集団が西番族のままであった。第2回目の識別調査は、この西番族からの要請で始まったという。劉輝強の「談川西南“西番”人的識別」によれば、涼山地区と雅安専区の一部の西番族が党の指導部などに自らの民族識別をたびたび求めた。そこで雲南省民委や四川省民族研究所、西南民族学院、涼山州の関係機関は工作組を組織して1981年8月25日から10月27日まで西昌や冕寧、甘洛、越西、喜徳、塩源、木里、石綿、漢源などの県で29の生産隊を調査し、〈西番〉の民族幹部や住民らと20数回の座談会を開き、1143人と会った。

劉報告では、自称、人口分布、言語、歴史、経済、宗教と習俗についてつぎのようにまとめている。〈西番〉には、納木依(ナムイ)、多須(トシュ)、里汝(リル)、爾蘇(アルス)、魯須(ロス)、木尼洛(ムニロ)、須迷(シュミ)の7種の自称がある。他称には、漢族が呼ぶ西番、西教、イ族が呼ぶ俄祖(オツ)がある。総人口は20862人(ブミとボバは含まない)、主に大渡河以南から金沙江以北の地域に自称集団ごとに集落をつく

り、イ族や漢族と共住する。各県の分布は、石棉 7000、木里 3200、冕寧 3584、甘洛 2748、越西 1800、漢源 1695、西昌 600、塩源 159、喜徳 76 人、九龍にもアルス、ムニヤ、リル、ナムイ、シュミがいるが詳しい調査はまだなされていない。

言語は、それぞれの自称集団が固有の言語をもっており、複雑である。アルス、トシュ、リル、ロス、ナムイはチベット・ビルマ語派チャン語支に属し、暫定的にアルス語とする。ムニロもチャン語支に属すが、康定のムニヤックの方言である。シュミはチベット語の方言でもプミ語の方言でもなく、更なる調査が必要である。またどの言語にも固有の文字がない。チベット文字はラマ僧と少数の上層部のものが使うだけであり、一般人はこれを「ラマ字」とよぶ。宗教は、かつては主に笨波教と「原始宗教」の 2 種であった。これらは並存しているが、木里や九龍に隣接する冕寧や石棉では笨波が主であり、その他の県では「原始宗教」が主である。またどの地域でも白石神を祀り、祖先を崇拜する。

社会の基本単位は父系の家庭で、家庭ごとに姓がある。複数の同姓が血縁関係を紐帯とした一族を構成する。婚姻は一夫一婦制で、父母がきめる。イトコ婚を優先する。葬礼は火葬と土葬があるが、元来は火葬である。女性の衣装は、白や黒の布を頭に巻き、額には銀の飾りをつけ、耳飾をする。衣服は白、黒、赤などの色のコントラストが鮮やかである。刺繍や切り紙が巧みである。歌舞に優れ、儀式では法螺貝を吹く。誠実で素朴、よく働き、浪費はしない、開放的で明るく、客をよくもてなす。集団は共通した強い一体感をもつ [劉, 2002 : 14 ~ 18]。

政府工作組の学者たちは以上の調査結果をふまえて、〈西番〉には、隣接するカム・チベット族とはやや異なる特徴がみられること、特に言語がチベット語の方言ではなく、むしろチャン語支に近いことを指摘した。しかし民族を決定するにあたって最も重視されたのは住民の意思であり、それはすなわち住民の意思に大きな影響力をもつ民族幹部の意向であった。結局、住民および住民代表の希望を尊重して西番族はチベット族になったとされる。

当時、西番族の民族決定に際して最も大きな発言力を示した一人が、涼山州政治協商会議副主席の穆文富であった。穆文富は、学者が指摘する言

語の違いに対して強い反対論をもっており、チベット族とすべき理由についてつぎのように語った。

涼山州には約6万のチベット族がおり、11種に下位分類され、それぞれが独自の言語をもつ。このうち木里にはシュミ、ガミ、プミ、リル、ナムイが約3万人、冕寧にはナムイ、トシュ、ミナ、廟頂(リル)が約2万5千人いる。これらの下位集団は、地理的原因から長期にわたってそれぞれが隔離された状態におかれていたため独自の言語が形成された。例えばナムイの言語は、前藏・後藏、甘孜のチベット語とは異なり、「地脚話」(地方の方言)といわれる。言語の差をいうのであれば、チベット語にも漢語にも複数の下位集団があり、違いがあつて当然ではないか。むしろみなラマ教を信仰していることが重要である。ただし冕寧のようなイ族や漢族との雑居地区では、寺院はすでに清朝期にはなくなって、50年代には冕寧の廟頂にしか残っておらず、信仰の程度は異なる。また民族名称についていえば、かつて「西番」の「番」には侮蔑的な意味が含まれており、ナムイは「西蕃」と呼ばれることに反感を持っていた。漢族は我々を「爛西番」と呼んだが、我々は漢族を「爛漢族」と呼んだ。西番の用語は改めるべきである、と。

穆文富は、学者による言語差を重視した見解が現地の住民感情にあわない、と強い反感を表した。彼の認識では〈西番〉はチベット仏教徒であり、彼自身もチベット仏教を篤く信仰していたからである。しかし筆者の調査によれば、大西番とよばれたナムイの中心地の九龍県子耳郷では、自民族独自のシャーマンを擁して葬式や治病には独特の経文や儀式を伝えており、自分たちこそチベット仏教成立以前の固有の宗教をもつ本来のチベット族であり、西番族という名称はそれを表すものであるとする。しかしその一方で冕寧県木耳郷の老人は、かつて出稼ぎに出て喧嘩した時に漢族から「お前たちは藏番ではない、西番か」と蔑まれたという<sup>(7)</sup>。〈西番〉の居住地は、一般に2000～3000メートルの閉鎖的な山間にあつて、現在もなお往來が不便である集落が少なくない。漢族との接触頻度の違いによって西番を蔑称として体験したかどうかには差があつたと思われる。穆文富のような

(7) 2004年9月、冕寧県木耳郷M村での聞き取りによる。西番という語については、60歳以上の男性がかつて街でいわれたことがあると語ったが、すでに多くの者がほとんど知らなかった。

旧上層部で民族幹部でもある者は、早い時期から漢族と接触しており、西番と呼ばれることが蔑視であると感じていたのであろう。民族幹部と一般住民、また住民の中でも漢族との接触度の違いによって西番の名称に対する認識に大きな差があったと思われる。

### (3) 民族幹部・穆文富

民族幹部穆文富は、西康の冕寧県の旧上層部出身の〈西番〉で、西康における人民共和革命に尽力し、涼山州や甘孜州の政府の要職を歴任した。彼は、冕寧や木里では地元の人々から「穆大爺」とよばれ、絶大な信望を得ている。2004年9月7日、四川省涼山彝族自治州西昌での聞き取りによれば、穆文富は、自身の略歴について次のように語った。

穆文富は、80数歳、冕寧出身のナムイ人である。祖父は冕寧県瀘寧区の土司で、かなりの名声があった。父は国民党政権下で郷長を務めた。3人兄弟の長男で、弟のうち一人は当時の習慣に従ってラマになった。省立小学校を卒業し、家内の私塾で多くの古書（経書）を学んだ。21歳の時に国民党政権下で自衛団を組織した（『冕寧県志』16頁には西南自衛団副団長とある）。しかし人民共和成立以前から当地の共産党指導者鄭某の紹介で解放軍と連絡をとって冕寧の解放を助けた。人民共和成立後は、進学を希望したが、党からの要請で地元の民族地区の指導者を歴任した。1950年11月まで民族幹部学校の責任者、同年12月から冕寧県の協商会副主席、さらに木里県に移って51年2月まで民族和解工作、同年3月に冕寧にもどり、再び木里に戻って木里での和平工作に従事し、民委副主任を務めた。53年に木里藏族自治州人民政府成立後、州都の西昌にもどって州人民政府工商科副科長、54年に民政科第一副科長、省政協委員、55年に省民委副主任となった。66年からの文化大革命では批判を受けて馬の飼育、運搬等をした。文化大革命終了後復帰し、76年に省政協常務委員、78年に涼山州政協副主席、副州長、州人民代表大会副主任等を歴任して退職した。

以上のように、穆文富は、主に出身地の冕寧県と隣接する木里県で民族幹部として一貫して現場で民族工作に従事してきた。特に自らが属する〈西番〉に関して人民共和下の四川省西南部における民族工作の状況を最もよく知る人物の一人である。穆文富によれば、ブミ〈西番〉の民族識別に

関して政府の調査組と現地の民族幹部との間につきのような激しいやりとりがあったという。

1980年代に民族識別に関する再調査が行なわれた時、四川省民委の工作隊（隊長は馬金輝）は、四川プミは雲南のプミ族と言語を同じくすることから、雲南（西番）がプミ族を民族名称としていることになってプミ族に改め、木里藏族自治州も木里プミ族自治州に変更することを中央に提議した。国家民委が1982年5月11日に出した「関与民族識別工作的幾点意見」では、当時、識別が必要とされた数十種の集団、約100万人は①漢族か少数民族か、②単一の少数民族か別のある少数民族か、③1つの民族か2つの民族かという3つの状況に分けて提起され、四川木里のチベット族と雲南寧蒗一帯のプミ族についても③の同一民族か否かという事例としてとりあげられた。

しかし四川のプミ（西番）は、60年代から「暫定的に」チベット族を名乗っており、80年代に政府側の調査組から言語の一致を理由にプミ族に改めるべきという提議がなされた時、地元側から強い反対がおきた。穆文富は、地元の意見としてつぎのように語った。

まず、プミ（西番）出身の当時の木里県書記が不満をもち、反対した。なぜならプミは、実は「蕃米」（bomi）といい、boはチベット族であることを示すものである。すなわちプミはかつてはチベット族であり、言語はチベット語とは異なるが、生活習慣や婚姻習慣はチベット族とほぼ同じである。中央政府は、言語の違いに依拠した学者達の意見を取り入れてプミをチベット族ではなく独立したプミ族とみなそうとするが、それは間違っている。言語の差というのであれば、チベット族内にも漢族内にも複数の下位分類がある。確かに言語の差は大であるが、スー油茶に代表される飲食習慣の一致やチベット仏教に対する深い信仰という点からいえば、チベット族とみなすべきである。特に木里の大ラマの地位は、ダライ・ラマ、パンチェン・ラマについて第3位であり、プミ族に改めることについては、パンチェン・ラマも反感をもっていた、とする。

結局、四川のプミ（西番）は、地元の反対によってチベット族となることが正式に決定された。T村には村全体みおろす山上に木里黄教派の総本山である木里大寺がそびえており、400年以上に及ぶチベット仏教の支配

を象徴している。チベット仏教の信仰は依然として彼らの精神的支柱であり、民族識別によってチベット族であることが決定したことは、彼らの信仰が認められたことを意味するものであった。

## おわりに

四川省西部は、4つの大河が南北に貫流する峡谷地帯であり、大河に沿って歴史的に様々な集団が移動し、複雑な民族構成や言語系統が形成された「民族走廊区」である。ここに居住するチベット族は、明清以降「西番」とよばれ、民国期には康番（カム・チベット族）と川西南の〈西番〉の区別があった。しかし〈西番〉の語は、すでに三国期の文献に初出しており、明清以降の「西番」よりも古い。また〈西番〉はチベット語の方言とは異なるチャン語支に属する言語をもち、チベット仏教伝来以前の独自の白石信仰やシャーマン、冠婚葬祭の儀式を伝えている。そのため人民共和国下の民族識別では、1950～60年代の識別で暫定的にチベット族とされ、未定の集団については西番族のままであったが、80年代の識別では最終的に西番族は抹消され、すべてがチベット族となった。

複数の下位集団からなる〈西番〉の民族識別に関しては、3つの問題があった。第1に、西番の用語は蔑称であるため族称としては使えないが、〈西番〉内には少なくとも4つ以上の言語を異にする下位集団があるため、新たな族称を決めるのは難しい。第2に、〈西番〉で最多の人口を擁するプミ語集団は、雲南側のプミが1961年にプミ族に認定されたことから、四川側のプミもプミ族とするべきという政府調査団の動きがあった。第3には、〈西番〉のナムイのように〈西番族〉を名乗ってきた集団をどう識別するのか、族称をどうするか、という問題である。

西番の用語については、蔑称であるとして改称が決定された。しかし「番」は元来、人を意味する「bo」の音訳であり、旧来の意味を伝えてきたとみられる九龍県のナムイのように、漢族との接触が少なかった〈西番族〉の中には「西番」の名称を蔑称とはせず、むしろ中央チベット族と区別する自集団の象徴とする集団もあった。ただしこの主張はナムイにとって西蔵のチベット族に対するものとしての意味はあっても、漢族社会の中では

蔑称であり、「名従主人」という原則の下、住民の意思に大きな影響力をもつ民族幹部の主導で西番の語は抹消された。

プミ語集団は、金沙江を境に雲南側の寧蒭、蘭坪県などと四川側の木里県にはほぼ同数の人口が分布する。雲南側では、10年余りにおよぶ政府工作組の民族調査や民族幹部および住民との話し合いを経て、チャン語支に属する言語をもつことや独自の新年や成人式、シャーマンを伝えることから自称のプミを族称とする独立したプミ族が誕生した。決定には政府工作組の提言とそれを受け入れた民族幹部の意向が大きく働いた。

四川プミの民族識別については、60年代にチベット族とされていたが、雲南プミがすでにプミ族として独立していたために80年代に再調査が行われた。政府工作組は民族名をプミ族に改め、木里藏族自治州を木里プミ族自治州に変更することを提案した。しかしこれには穆文富に代表される地元の民族幹部、住民および宗教界が強く反対した。木里は、16世紀にチベット仏教黄教が伝来して以来、チベット仏教が深く浸透した地域であり、木里仏教界はダライ・ラマ、バンチェン・ラマにつぐ第3位に位置していた。宗教界上層部や民族幹部が反対するのは当然であった。

四川プミ自身も、すでに400年以上もチベット仏教を深く信仰しており、チベット仏教徒＝チベット族であるとの意識が強い。彼らはチャン語支に属するプミ語を用い、新年や冠婚葬祭の儀式などにプミ独自の文化が雲南のプミ族より濃厚に維持されており、隣接するチベット族のそれとは明らかに異なっているが、チベット仏教の信仰においてラサのチベット族に強い連帯感をもっている。彼らにとって政府工作組の意見を受け入れてチベット族でなくなることはチベット仏教を否定するに等しい。四川プミは、明らかに祖先と言語を雲南プミと共有する集団ではあったが、数百年におよぶチベット仏教への信仰はすでに精神的支柱となっており、自民族意識の形成に大きく作用していた。チベット族であることを強く主張した民族幹部の判断は、最もよく住民の意思を反映したとものであったといえよう。

#### 〔引用文献〕

雲南省民族事務委員会 (2002・原載は1954) 「雲南“西番”確是一个单一民族」

- 『普米研究文集』雲南民族出版社  
「雲南民族工作四十年」編写組編（1994）『雲南民族工作四十年』（上）雲南民族出版社 130～132 頁
- 奥山直司（1989）「チベット小事典」『極限の高地 チベット世界』小学館 182 頁
- 木里藏族自治州志編纂委員會編（1995）『木里藏族自治州志』四川人民出版社
- 木里藏族自治州政府辦公室（1992）「木里県平叛始末」『木里文史』第三輯（上）195～200 頁
- 黄光学等（2005）『民族識別—56 民族の来歴』民族出版社
- 胡鏡明等（2002）「国内普米研究回顧与前瞻」『普米研究文集』1～2 頁
- 四川百科全書編纂委員會編（1997）『四川百科全書』四川辞書出版社
- 張全昌（1962）「四川西番識別調査小結論」四川民族史志 1978 年第 1 期
- 西田龍雄（1970）『西番館訳語の研究—チベット言語学序説』松香堂
- R・A・スタン著，山口瑞鳳等訳（1973）『チベットの文化』岩波書店
- 林耀華等（2002・原載は 1954）「永勝，麗江両県西番族識別小結」『普米研究文集』9～11 頁
- 費孝通（1995・原載は 1980）「関与我国民族的識別問題」（原載は『中国社会科学』1980 年第 1 期）『中国的民族識別』民族出版社 327～350 頁
- 邊政編（1930）「西康特区十四県最近調査表」『邊政』1～128 頁
- 方国喻等（2002・原載 1954）「蘭坪，寧蒭“西番”族識別小結」『普米研究文集』6～8 頁
- 松岡正子（2000）『中国青藏高原東部の少数民族—チャン族と四川チベット族』ゆまに書房
- 松岡正子（2003）「西番におけるプミ語集団—四川桃巴プミ・チベット族と雲南箬花プミ族を事例として」『民族の移動と文化の動態—中国周縁地域の歴史と現在』風響社 419～475 頁
- 松岡正子（2005）「西番諸集団の社会—四川省木里県水洛郷の〈西番〉チベット族を事例として」『中国の民族表象—南部諸地域の人類学・歴史学的研究』風響社 175～205 頁
- 山口瑞鳳（1987）『チベット』上 東京大学出版会
- 楊静仁等（1985）「関与西康省藏族自治州基本状況的報告」四川省編輯組『四川省甘孜州藏族社会歴史調査』四川省社会科学院出版社 1 頁
- 楊侯第主編（2000）『散雜居民族工作政策法规選編』民族出版社 35～48 頁
- 劉耀強（2002・原載 1982）「談川西南“西番”人的識別」『普米研究文集』雲南民族出版社

## 川西南"西番族"的民族識別 (1)

—以普米語集團為例

松岡正子

四川西部是岷江、大渡河、雅魯江和金沙江四條大河縱貫南北的高山峽谷，是因歷史上幾個民族集團沿河遷徙而形成民族構成與語言系統極為複雜的"民族走廊區"。川西藏族，明清以來被稱為"西番"。從語言上看，"西番"使用着兩種語言，1個是屬漢藏語系藏緬語族藏語支的語言，另1個雖為同一語系同一語族但却是羌語支的語言。使用後一語言者集中在川西南，由於在語言上和信仰上和使用前一語言者（在晉代文獻上被稱西番）不同，為區別起見而稱之為"西番族"。

"西番族"分為普米，納木義，木雅等11個下位集團，每個集團都有其固有的語言和自稱。其中普米語集團在"西番"中人口最多，這個集團又以金沙江為界分成四川普米和雲南普米兩部分。雲南普米是13世紀由四川遷到雲南的，仍保持着原先的語言和習慣。但是在信仰上二者有所區別，四川普米信仰藏傳佛教、而雲南普米仍保存原始宗教。

雲南普米被政府工作組在1950年代識別為普米族。但是川西南"西番族"由於有11個下位集團而不能決定統一的族稱，暫時被歸入藏族，四川普米也屬藏族。1980年代進行第2次民族識別時，鑑於四川普米所用語言併非藏語、而雲南普米已被承認為普米族，政府工作組建議把四川普米從藏族改為普米族。四川普米對此建議甚為反感，因為他們長期已受到藏傳佛教的影響併形成了和西藏藏族同樣的民族意識。四川普米和雲南普米雖有一致的語言，但在精神上沒有共同語言。在反對政府工作組建議的活動中，穆文富等老民族幹部作出了很大貢獻。中央政府遵照"名從主人"和"和愛國上層人士結成統一戰線"的民族政策的原則，承認四川普米為藏族。

